
it's better to burn out than to fade away

菩提樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

it's better to burn out than
to fade away

【Nコード】

N7687N

【作者名】

菩提樹

【あらすじ】

Kが自殺した。
溢れるほどの才能を持ちながら、あいつが何故死んだのか。それは俺だけが知っている。

前編

Kが自殺した。

俺がそれを知ったのは、奴の恋人からの電話でだった。

「Kが頭から血を流してるの、どうしよう」

要領を得ないそれだけの言葉で、俺は奴が「ついにやった」のだと理解した。殺されたとは微塵も思わなかった。驚きもなかった。衝撃はあったが、それは恐れていた事態がとうとう起こってしまったことへの、諦念混じりのそれでしかなかった。

ずっと前から、俺はこのことを予感していた。

わかっていながらみすみすKを死なせたのだ。だがこの時、俺が感じたのは罪悪感でも悲しみでもなく痛みを伴った安堵だったと言ったら、良識ある連中は眉を顰めるだろうか。

Kは死ぬしかなかったし、死んだ方が幸せな男だった。

ずっと前から、俺はそのことを知っていた。

実際にKの死を伝えられても、その結論は覆らなかった。今でもそうだ。奴は結局のところ、死ぬために生まれてきた男だったのだろうと、俺は今でもそう思っている。

Kは、陳腐な言い方をすれば、いわゆるロックスターってやつだった。

彗星の如く現れた、アメリカ音楽界の寵児。永遠の反逆者。ロックの革命家。Kの生前も死後もこんな使い古された謳い文句が後を絶つことはなかったが、奴自身はそうやってステレオタイプの偶像に押し込められることを何より嫌っていた。

「凡人共の錆びついた感性に理解できるほど、俺は平凡な人間じゃ

ねえよ」

Kはしばしばそう言って憚らなかった。

「よくもまあ似たようなことばかり繰り返して、恥ずかしくねえのか。ロックスターだ、天才だ、カリスマだって、何度目だよそれ。何の取り柄もない凡人が、才能がどういうものかなんてわかるのかよ」

辛辣で、尊大この上ない。

成功で図に乗っているのではなく、Kというのはもともとそういう男だった。俺がKと知り合って一緒にバンドをやり始めたのは一九八七年……二十歳の時だったが、その頃既にKはKそのものであり、呆れるくらいに高慢ちきな餓鬼だった。

出会ったのはライブハウスだった。

せまっ苦しい箱に押し込められて、騒音一步手前の音の洪水に浸ることの何があそこまで楽しいのか、自分のことながらさっぱりわからないが、とにかく俺は飯を食うよりも音楽が好きないかれた……そこそこいかれた落ちこぼれの一人だった。

その日の俺は、ライブに完全に退屈し切っていた。

出演していたバンドは凡庸もいいところだった。そこそこのヴォーカルに、そこそこの演奏、どこかで聴いたような、五分もすれば忘れちまいそうな曲。耐えられないほど酷くは無い。でもそれって、罵られるより悪いことだろ？

飽き飽きして、帰ろうと後ろを振り返った時に、ふと目に留まったのがKだった。

ぼろぼろのTシャツとジーンズを身に付けた、痩せぎすの金髪の男。俺同様に退屈し切っているのは一目瞭然で、ただ俺と違ったのはバンドに見下すような視線を向けていたことだ。まるで自分が奴らの及びもしない高みにいるかのような目つきだった。観客の群れの中で、その姿は異質で、浮き上がっていた。

俺が見ていることに気づくと、そいつは「何だよ」と言いたげな冷笑を浮かべて、会場を出て行った。

俺はその背中を追いかけた。何でそうしたのかはわからない。どう見たって性格の良さそうな奴じゃないし、何を話したかったわけでもないのに、俺は吸い寄せられるように奴を追って外に出た。

夜の冷たい外気が頬を撫でると同時に、煙草の匂いが鼻を掠めた。振り返ると、Kはすぐそこにいた。暗い路地でも、その青い目が妙に印象的だった。

「――お前、ゲイ？」

壁に寄り掛かったKの、遠慮も何もない質問に俺はたじろいだ。

「いや、違う」

「ふうん。じゃあ何で俺のケツ追っかけてきたんだよ」

「それは…」

わからないんだ、と白状するのはいくらなんでも馬鹿みたいだ。が、上手い理由が思いつかない。そもそも理由なんて無いのだから、当たり前だ。幸いと言うべきか、Kは無関心と嘲笑の混ざった目で、じっと俺を見つめて「お前、今のライブどう思った？」と唐突に訊ねてきた。

「どうって……別に何も」

下手な嘘は通じないと直感的に悟っていたから、俺は正直に答えた。果たしてKは愉快そうに笑った。聞いていて寒気のするような笑い方だった。

「あれ、俺の元バンド仲間」

「え」

「救いようねえだろ。ブラック・サバスの出来損ないみてえな音だ。あんなのを人前で垂れ流すくらいなら、俺は死んだ方がましだね」

「……そうだな」

死んだ方がまし、とまでは言わないが、自分だったらあんな曲は作らない、とは思った。俺も少し前に、音楽性の違いからバンドを脱退したばかりだったから、言い方はともかくKの心中は察することができた。

Kはそこで笑いを引っ込めて、まじまじと俺を見返した。

初めて俺個人に関心を持ったような目だった。

「……お前、名前は？」

その一年後、俺とKは一緒にバンドをやり始めた。

俺がベースで、Kがヴォーカルとギター担当だ。ドラムはなかなか居着かなかった。というのも、Kが次々と首にしていってたからだ。最終的にKを満足させる腕を持ったDが加入するまでの三年間、あいつは常に苛々していた。もともと他人に配慮するような性格じゃないから、そうなるとバンド内の雰囲気は最悪だった。

だがそれでも問題は無かった。

Kがまさしく天才だったからだ。

あらゆる面で、奴には有り余る才能があった。作曲センス。歌唱能力。ステージでの存在感。全てにおいて神憑っていた。Kの前では、凡人であることこそ罪だった。幸いにもKは俺の演奏能力には合格点をくれたようで、死の直前まで追い出されることなく、才能を近くで見続けることができたのは、俺にとって生涯最大の幸福だった。

あいつが流行りのヘヴィメタルやステレオタイプのロックを否定するような斬新なメロディを生み出すたびに、魂をかきむしる様な歌をマイクに乗せるたびに、気がふれたようにステージ上で暴れ回るたびに、俺は畏れさえ感じていた。

自分が何かとんでもない奇跡を目の当たりにしているんじゃないか、と考えたこともある。そして怖くなった。奇跡はいつまでも続かない。

実際、Kは作曲にしても歌にしてもまるで命を削っているかのような没頭ぶりだった。

普段は自分からべらべら喋るタイプじゃなかったが、こと音楽に関しては饒舌で、妥協がなかった。

意見が食い違った時なんて、酷いもんだった。Kは絶対に引かないし、奴の才能を疑わない俺だって、常にはいいとは言っていない。大抵の場合、怒り狂ったKはギターを投げつけて出て行っちゃもうもんだったが、そんな時、奴が二度と戻ってこないんじゃないかと俺はひやひやした。

それでも何とかやっていけたのは、俺とKに共通する部分が多かったからだろう。

二人とも当時流行りの音楽を馬鹿らしいと思っていたし、それを有難がる元バンド仲間にも怒りを感じていたし、親が離婚して貧乏だった境遇まで同じだった。

Kを語る上で、やっぱり親のことは避けて通れない話題だろう。なぜかと言えば、あいつという人間を作り上げた礎であり、あいつが音楽に心血を注ぐようになった遠因でもあると思うからだ。

と言っても、実のところそのことについて俺は詳しく知らない。俺たちがブレイクしてからも、Kが死んだ後もマスコミ共はKの生い立ちに興味津々で、雑誌にも新聞にもその手の情報は溢れ返っていたが、K自身はそのことを話したがいなかった。別に秘密主義者ってわけじゃない。事実、故郷のアバデインのことは田舎だなんだと糞味噌に貶していたし、ハイスクール時代に友達がいなかったなんてことも堂々と公言していたくらいだ。

奴が親について話したがいなかったのは、それだけ傷ついていたってことなんだろう。

Kが繊細だと言うと、奴を直接知っていた人間ですら意外そうな顔をするが、あいつほど感受性が鋭くて人の感情に敏感な男はいなかった――健全に生きるには敏感すぎたとも言えるが。

そういうわけで俺はKから直接、奴の家庭環境の実態を聞いたことはなかったが、ある音楽雑誌でKが答えているインタビューを見

つけたのでここで紹介しておく。余談だが、この時のKは素面じゃなかった。酒かドラッグか、あるいはその両方か……定期的に多分、酒の方だろう。それなしでこれほど饒舌なわけがない。それでも、Kという人間の本質にいくら迫ることはできると思う。

——あなたがたのメジャーデビューアルバムがビルボードチャート一位になったことについて、どのように受け止めていますか？

「最高だね。音楽で認められるのは俺の夢だったし、これであいつらを見返せたんじゃないかな」

——あいつらとは？

「俺の周りの連中。家族とか、学校で俺をぶちのめしてた体育会系の奴らとか、元バンド仲間とか。今になって俺に取り入ろうとして、笑えるけどな」

——ご両親は離婚されていますね。それがあなたの音楽活動に何らかの影響を与えたと思いますか？

「ああ。俺が八歳の時に、両親は離婚した。ショックだったよ。俺は二人を愛していたし、二人も俺を愛していると思ってたからな。実際は、俺は親戚中をたらい回しにされた。どこに行っても厄介者さ。それを露骨に出すか、そうでないかって違いはあったけど。で、気づいたんだ。自分以外の何かを信じるなんて馬鹿げてるって。その気持ちじゃなかったら、ここまで音楽に打ち込めたかわからないな」

——つまり、周囲への反発心が音楽に打ち込む原動力だった？

「俺が周囲に反発したんじゃない。周囲が俺を拒絶したんだ——ま、どっちでも同じことか。とにかく俺は暗い餓鬼だったよ。八歳の時から、死ぬことばかり考えてた。でも十四の誕生日に伯父さんがギターを買ってくれてさ。それを初めて触った時にわかったんだ。これが俺のやるべきことなんだって」

——当時から自分の才能を確信していたんですね。

「こんなに売れるとは思ってなかったけどな。売りたいとは思ってた。俺のやってる音楽が認められるってことは、俺自身が単なる屑じゃないって証明になると思ったんだ。少なくとも、一つは取り柄のある奴だつてさ。でも金とか名誉とか、そういうものが欲しかったわけじゃない」

——しかしこの成功で、あなたはアメリカ中に名前を知られたわけでしょう。莫大な富も名声も手に入れた。それに何の価値も感じていないと？

「あんたにはわからないよ。随分前から気づいてただけど、俺のモラルとか価値観は、普通の人間とは大幅にずれてるんだ。俺がいいと思ったことは世間から顰蹙を買うし、逆に俺には到底耐えられないようなことは公然と受け入れられてる。現に俺が『金も名声も要らない』ってどんなに言ったところで、白々しいし偽善的だろでも本音を言ってるのにそう思われたら、俺だって傷つく。だから……俺は、俺の思ってることや感じてることを、本当は他人に知ってもらいたくないんだ」

本人が言うとおり、Kという男の精神構造は、常人とはずれていたのだろう。俺はあいつが陽気にばか笑いしているところを見たことがない。まずナイスガイなんて言葉は似合わなかった。その気になれば社交的に振る舞うこともできたが、他人との交流を心から楽しんでいたことはなかったんじゃないかと思う。そしてそのことに後ろめたさを感じていた——多分、他人の考えていることがわかりすぎたせいだろう。いつも憂鬱そうで、音楽に関わっていない時は心ここにあらずな目をしていた。ライブになればぶっ倒れるまで暴れ回るし、好き嫌いがはっきりしていて有名バンドだろうが容赦なく批判したり、それを通り越して喧嘩さえ売っていたから、傲慢で自信家に見られることが多かったが、音楽に対するこだわりを取っ

たら、案外残るのはコンプレックスの塊だったのかもしれない。

でなければ、あんな風に歌えないだろう。

Kは、声質そのものは決して美声ではなかったし、裏声が綺麗に出るとか声域が広いとかそんな強みもなかった。それでも、あいつの歌は誰よりも心に突き刺さる歌だった。滅茶苦茶に叫んでいるようにでも、そこに込められた怒りや痛みに聴衆を引きずりこむパワーがあった。

つまり何が言いたいのかというと――あいつの本当の心が知りたかったら、面と向かって喋るんじゃなく音楽を聴くべきだ。

バンド結成からKが死ぬまでの七年間で、俺たちはアルバムを三枚出したが、一枚目はインディーズで完全に好き勝手に作った代物だった。荒削りで、レコーディングなんて十日で済ませた勢いだけの作品だ。このアルバムには、K曰く「ビートルズを目指した」ポップソングが一曲だけ入っているが、それ以外はKの内面を表すかの如く、嵐のように荒々しく激しい。

音を感情に例えられるとしたら、怒り、憎しみ、鬱屈……そんなもので溢れていた。洗練とは程遠い。だが今にして思えば、この頃が最も純粹に音楽に取り組んでいたのかもしれない。

このアルバムは、大成功とまではいかなかったが、そこそこに売れ、そこそこに評価も得た。滑り出しとしては上々だ。丁度ドラムのDが加入して、俺もKももつといいものを作ろうと張り切った。

そして二年後に完成したアルバムが――「N***」だった。

満を持してのメジャーデビューってやつだ。音はよりポップに、大衆受けを考えて作った。バンドの三人ともが、これが自分たちのキャリアにおいて大事なアルバムになるってことをわかってた。特にKは昼も夜も「N***」のことばかり考えていた。あいつにとってはまさに命がけの仕事だったに違いない。上のインタビューからもわかるとおり、Kの音楽が認められるってことは、K自身が認められるってことと同義だった。仮に「N***」がこけていたら、あいつはやっぱり絶望して自殺していただろう。もつとも、

K本人にとって三年の延命がどういう意味を持っていたのかは、今以てわからないが。

結論から言うと「N***」は予想以上に売れた。馬鹿売れした。評論家どもはこぞって「ロック新時代の幕開け」だの「新たなカリスマ」だの喚き立てたし、ティーンエイジャーや主婦まで俺たちのCDを買い漁った。アメリカだけで一千万枚は売れただろう。一夜にして俺たちはスターになった。特にほとんどの曲を書いて、フロントマンでもあったKには誰もが注目し、マスコミはその生い立ちから人間性まで何もかも暴き立てようと躍起になっていた。

ここで言うておきたいが、Kの死の原因が、この過剰な注目——つまり、成功による急激な環境の変化に耐えられなかったからだという意見は、大いなる間違いだ。

確かに自分たちがこれほどの熱狂をもって音楽界に迎えられるとは思ってもみなかったが、アルバム制作において「大衆に受けるように」作曲をしていたのは他ならぬK自身だ。晩年のKの口癖が「成功なんて糞食らえ」だったせいで、予期せぬ大成功に翻弄された悲劇のスター、というレッテルを貼られてしまったが、自分の作品がどの程度の出来で、どんな評価を受けるのかということを、Kは的確に把握していたと思う。完成したアルバムを聴いたKが一度だけ、子供みたいな笑顔を見せたのを、俺ははつきり覚えている。

Kが本当に振り回されたのは周りの騒音じゃなく、自分の内側の葛藤だった。

「N***」がもてはやされ、面白いように売り上げが伸びる一方で、Kはスランプに陥った。いや、スランプという言い方は適切じゃないかもしれない。多忙の合間を縫って何曲か作曲もしていたし、クオリティが落ちたとか何も浮かばないとか、そういうことはなかった。

ただ何が不満なのか、書いても書いても全部ぼつにしちまって、
どんどん機嫌が悪くなっていくのが傍からもわかった。おかしいこ
とに、K自身も自分の作った曲に具体的な不満があるわけではない
ようだった。メロディが気に食わないとか、フックが足りないとか、
インパクトがないとか、歌詞が上手く乗らないとか、そういうこと
ではなかったようだ。

だから俺にもDにも、どうしようもなかった。やろうと思えば俺
もDも作曲できたが、それはKの才能の前では一段劣るものであつ
たし、である以上、音に関して異常に厳しいKを納得させられるわ
けがない。

しかもスランプとほぼ同時期に、Kは原因不明の頭痛に悩まされ
るようになった。

それは前触れもなく起こった。特にライブ前に多かった。何とな
く痛いなんて生易しいものじゃなく、激痛ってレベルだった。ライ
ブの十分前だったのにKが楽屋でのたうちまわり始めたら、もうど
うしようもなかった。

そんな状態でも、Kは一度としてステージをキャンセルしなかつ
た。痛みを誤魔化すためだろうが、暴れっぷりはますます激化して、
一晚に何本もギターはぶっ壊すわ、大袈裟に倒れて見せるわ、口汚
く観客を罵るわで酷いもんだったが、そんな姿も不思議と絵になる
男だった。「全員くたばれ」とあの冷笑を浮かべた目で言って、あ
そこまで熱狂される人間を俺は他に知らない。

Kがスランプになって暫くしてから、俺は奴と一戦やらかしたこ
とがある。それは移動の車の中でのことだった。二人とも後部座席
に座っていて、俺がKに曲の進行状況を訊ねた。Kは、全然駄目だ、
とかそんな意味の答えを返してきた。まるで興味のなさそうな態度
が、この時は無性に癪に障った。

「いつまでかかるんだよ」

「知るかよ」

「いい加減にしろよ。俺は一発屋で終わりたくねえんだ。勿体ぶってるうちに、飽きられたらどうするんだよ。また貧乏生活に戻りたいのか？」

「俺は平気だね。糞みたいな成功に浮かれて魂を売り渡すくらいなら、いつだって掃除夫に戻ってやるよ」

蔑むようなKの目は、俺を苛立たせた。綺麗事だが、こいつは心から本気で言っている。この男は、音楽に対して一切の妥協が出来ないのだ。そして自分と同じような気持ちで取り組めない俺を、責めている。

「大体」

と、咄嗟に反論できない俺を横目で見ながら、Kは唇を歪めた。

「一枚目だって、俺は『N***』と同じくらい良い出来だと思ってたのに、セールスは桁違いだろ。今売れてんのは、たまたまだよ。飽きられる時は、どんなにあがいたって飽きられる」

「芸術家気取りの次は、卑下かよ。お前が何に不満なのか知らないけどな、お前が簡単にごみ箱に放り込んでる曲の山にも『N***』にも、お前が思ってるほど違いなんてないぞ」

俺の語尾に被せるように、ごん、と鈍い音がした。見ると、Kが側頭部を窓ガラスにぶつけたところだった。

「おい…」

「うるせえな。喋るな」

Kは頭を押さえて、呻くように言った。例の頭痛らしい。

「大丈夫かよ」

流石に心配して訊くも、顔を上げたKの視線に息を呑んだ。Kはもともと、妙に目力のある奴だったが、この時はそのくすんだ青い目に炎が宿っているようだった。

言葉をなくす俺に、Kは「書いてやるよ」と絞り出すような声で言った。

「あんなものでよければ、書いてやるよ、いくらだって——いくらだって、書けるんだ」

後編

Kはその言葉通り、無闇に曲を書き散らしては破り捨てる、なんて無駄なこととはしなくなった。相変わらず神経質で、俺やDの領分にも容赦なく口は出したが、それは珍しいことではない。その代わりにもっと悪いことになった。

ドラッグだ。

ただでさえミュージシャンなんてものをやってれば、ドラッグは手に入りやすい。俺もDも薬には嫌悪感を持っていたから手は出さなかったが、Kはその境界線をあっさり踏み越えた。しかも悪いこととも思っていないようだった。最初に薬を使った時、あいつは俺に電話してきた。俺がクリーンで、ドラッグを嫌っていることを知っているくせに、だ。

むかついて電話を切ろうとすると、「何怒ってるんだよ」とやけに機嫌のいい声が耳を突いた。

『俺は今最高の気分なんだぜ』

「ラリってるだけだろ」

無駄と知りつつそう言うと、押し殺したような笑い声が返ってきた。

『喜んでくれたっていいだろ。アシッドを使ったらあのくそ忌々しい頭痛が止まったんだ。これでもう藪医者にかからなくてすむと思うと、せいせいしたぜ』

返すべき言葉なら十は浮かんだ。ドラッグは毒だ。そんなもので体の不調が治るわけない。あつという間に廃人になるのが関の山だ。だが俺が何かを口にする前に、Kは一方的に電話を切りやがった。かけ直す気にもならず、受話器を放り投げてみたものの、どんよりとした嫌な気持ちは消えてはくれなかった。

その時の予感通り、Kはどんどん荒んでいった。いや、もしかしたらドラッグは切っ掛けに過ぎず、内面は既に荒廃しきっていたのかもしれない。何があいつをそこまで追い詰めたのか、俺にはまるでわからなかった。そんな人間が通りいっぺんの説教をしたところで、他人の心を変えられるだろうか。特にKみたいに、何箇所もねじくれ曲がっている男の心を。

俺だってKを救いたかった。俺はKの才能を愛していた。

こんなことで天から授かった能力が潰されるのかと思うと、耐えられなかった。

だがあいつは俺の忠告なんて聞く気がなかった。このままいけば、いずれ身を滅ぼすだろうことは言われるまでもなくわかっていたはずだが、それすらどうでもよかったようだ。

金や名声を無意味だと断じたのと同じように、自分の肉体もKにとっては何値のないものだった。あいつが唯一、執着していたのは音楽だけだった。それも、他人がどう思うかはどうでもよくて、自分が納得できるかだけに拘っていたから、何ものもあいつに影響を与えることはできなかった。

「誰かのために歌ったことなんてないね」

アシッドで恍惚とした表情で、Kはこう言った。

「俺は、俺のためだけに音楽をやってる。これからだって、そうするつもりだ」

ドラッグを使い始めたのとはほぼ同時期に、Kはある女と付き合い始めた。

名前をCと言って、俺たちほどじゃないがそこそこ売れてるバンドのヴォーカルだ。ブロンドと真っ赤な口紅が印象的な、なかなかの美人だった。それは認める。

だが性格の方はと言うと……お世辞にも褒められたもんじゃなかった。

良く言えば男勝り、悪く言えば雌犬。バンドを組む前はストリッパーをやっていた前歴もあり、とても女らしい優しさや癒しなど望むべくもない。それだけならまだしも、CはKと同じ問題を抱えていた――つまり、ドラッグだ。

知り合ったきっかけが、お互いの持つドラッグの交換だったって言うんだから、呆れて物も言えないとはこのことだ。

そんな二人が何も問題を起こさないわけがないだろう。

ある音楽関係の授賞式に出席していた時のことだ。会場にはあらゆる一流の歌手やバンドが集まっていて、その中にはAという男がいた。Aは俺たちよりも前に有名になったバンドのヴォーカルで、Kとはもともと不仲だった。デビュー当初、Aの方はKに好意的だったのだが、Kの方はAを嫌っていた。「あいつは前時代の遺物だ」というのがKの言い分だった。そんなことを公然と口にされれば、Aだって面白くないだろう。

バックステージで偶然、鉢合わせた時、Aを挑発したのはCだった。Cがどうしてそんな真似をしたのか俺は知らない。以前、何かで揉めたことがあるのか、ただAの顔が気に入らなかったのか、むしろくしゃしていたのか。一つ言えることは、Cという女は滅法口の立つ女だった。しかも、相手をけなすための語彙もやたらと豊富で、毒舌でもある。

一方的に言い負かされたAは、Cの隣のKに向かって「この雌犬を黙らせろ」と毒づいた。

Kは怒りもせず、Cの方に顔を向けて「黙れ、雌犬」と言い放った。

Cは大笑いし、Aは怒りで真っ赤になった。

この一事からもわかるとおり、Cの存在はKを更生させるどころか、ますます破滅に追いやっているようにしか思えなかった。

下世話なパパラッチが勘繰るまでもなく、CがKに近づいたのは

売名のためだというのが、俺とDの意見だった。同意しなかったのは当のK本人だけだ。信じられないことに、あいつはCに惚れていた。結婚すると言い出した時は、正気を疑ったもんだ。マスコミはこのヤク中カップルに興味津々で、CとKはどこに行ってもカメラに追いかけられていた。そのうちCが妊娠しているのではないかという噂が立ち、妊婦のくせにドラッグを使っているのかと各方面から非難が殺到し始めた。

「妊娠なんてしてないわよ」

Cは毅然としてこう言った。

「仮にそうだったとしても、あんた達に何の関係もないでしょ。放っておいて」

Cを認められる所が一つあるとしたら、この男顔負けの図太さだろう。

Kの方は、すっかりまいていた。新アルバムのレコーディングにかこつけてスタジオに引き籠ってはみたものの、そこでも噂は本当なのか、これを機にCとは別れた方がいいと周りの人間——そこには俺とDも含まれていた——に煩く喚き立てられることから逃れられなかった。

今にして思えば、俺だけでもKをそっとしておいてやるべきだった。だが当時の俺は若かったし、余裕がなかった。Kが潰れれば、俺も沈む。忠告と言えば聞こえはいいが、それは完全なる善意からの言葉ではなかった。それがまたKを傷つけていた。

「俺がいいと思ったものは、いつも否定される」

皮肉っぽくこう言っていたことがある。

「面白いよな。そんな俺の作った音楽が、何でこんなに受けてるんだか」

それでも今までのKなら、音楽に没頭している時だけは俗世の雑事から逃れられる筈だった。

しかしKは既に、音楽に対する情熱を失っていた。少なくとも俺にはそう見えた。

相変わらずソングライターとしての能力はずば抜けていたが、そこにK自身の魂は込められていなかった。というのも、没頭している時のあの熱に浮かされたような目ではなく、淡々とした心ここにあらずといった表情で、作業をこなしていたからだ。まさに機械的という表現がぴったりだ。義務だから仕方なくやっている、これで満足なんだろう、という声がありありと聞こえてくるようだった。ストレスからか、Kのドラッグに対する依存度はますます酷くなっていた。

びっくりするほど陽気になったかと思えば、次の瞬間はこの世の終わりかと思うほど陰鬱に塞ぎこむ。

最早、Kの逃避する先は音楽ではなくドラッグになっていた。

何とかアルバムを完成させた後、俺たちはツアーでローマに向かった。Cも一緒だ。俺は、これが終わったら休暇を取るようにKに勧めるつもりだった。今まではあんまり忙しすぎたのだ。心身ともにリフレッシュすれば、Kも自分の馬鹿さ加減に気づくかもしれない。

結果的に、それは一步遅かったと言えるだろう。

滞在先のホテルで、Kは鎮痛剤を五十錠も飲んで昏睡状態に陥ったのだ。

幸いにもKは一命を取り留めた。

Cが同室にいないければそのまま死んでいただろう。そうは言っても、やはり俺はCに感謝する気になれなかった。あの女がKの精神に悪影響を与える一因だと、信じ切っていたからだ。

Kの意識が戻ってから、俺は病院に見舞いに行った。病室の前で、部屋から出てくるCと出くわした時に「もう十分だろ」と声を掛けたのも、考えた末のことだ。

Cはきょとんとした顔で、「どういう意味？」と訊き返してきた。

「そろそろKを解放してやれよ」

「何、それ。あんた何様？」

「もう十分、名前は売れただろ？これ以上、何を絞り取る気なんだよ」

「絞り取る？それはあんたでしょ？あの人に釣り合う才能もないくせに、ハイエナみたいにあの人の才能に群がって。ライバルは追い払いたいってわけ？」

俺は腹が立った。出鱈目だったからじゃない。その逆だ。

「俺はあいつのために言ってるんだ。お前はあいつを廃人にしたいのか？あいつには助けが必要だって、わからないのか？」

「わかってないのは、あんたよ」

Cは鼻で笑った。

「あの人は上から引っ張り上げてもらうことなんて、望んでないのよ。自分が間違ってるって教えてもらうことになって、飽き飽きしてるの。同じ場所に居られないなら、誰の存在にも意味なんてないんだから」

Cは中指を突き立てて見せてから、帰って行った。

俺は不愉快だったが、そのまま帰るわけにもいかず、Kの病室に入った。Kはベッドに横になっていて、俺を見ると「喧嘩するなよ」といつもの冷笑を浮かべて言った。大声を出したつもりはなかったが、聞こえていたらしい。

「悪い……具合はどうだ？」

「ああ、見ての通りぴんぴんしてるよ。俺も案外しぶといな」

つまらなそうにそう言うKを見て、俺は確信した。今回の件は事故じゃなく、こいつが故意にやったことだ。Kは死ぬつもりで、薬を飲んだのだ。

「どうしてこんなことしたんだ」

誤魔化しは許さないつもりで真っ直ぐにKを見ると、奴はぼんやりと宙に視線を彷徨わせた末に、痛みを湛えた目で俺を見返した。

「空っぽだから」

「空っぽ？」

おかしいことを言う。Kには誰もが認める才能がある。望めば何だって手に入るのに。

俺が怪訝そうな顔をしていると、Kは失望したかのように視線を逸らし、深い溜息を吐いた。

「俺がどうして音楽やってたか、知ってるか？」

「……いや」

「苦痛から解放されるためだよ」

「苦痛？」

「俺は、人間と関わるのが苦痛なんだよ。親父に捨てられた時から、俺は自分の価値を信じられない。自分をさらけ出して、それでも他人に必要とされる何かがあるなんて信じられない。でも、ギターに触ってる時だけ、俺はそういう思いから解放された。どんな惨めな思いも、音に昇華して『この曲を作るためにあんな思いをしたんだ』って納得できた。俺の中の音だけは、俺を裏切らない」

「……」

「『N***』がヒットした時、『ざまあみろ』って思ったよ。俺をゴミみたいに捨てたあいつらも、俺を馬鹿にした連中も後悔すればいいんだ、ってさ。もう誰も俺を無視しない。誰もが俺を必要としてる」

「そうだ、お前には才能があるんだよ。みんな、お前の歌を聴きたがってる。立ち直って欲しいと思ってるんだよ」

Kにこのまま話させてはいけけない、と本能が訴えていた。だがKは俺の言葉なんて聞いちゃいなかった。

「売れたから冷めるなんて、変な話だよな」

と自嘲気味に言う。

「あんなに愛してた筈なのに、もうその時の気持ちがい思い出せない。どこを探しても、俺の中にはもう何もない。全部、惰性だ。惰性で曲書いて、レコーディングして、ツアー組んで、ライブして、歌って、煽って、適当にセット壊す。タイムカード押した方がいいんじゃない」

やないかってくらい何も感じてないのに、それでもファンは喜ぶ。俺はこんなもののために、自分の魂を売り渡したのか？反吐が出るね——俺は、自分の才能が憎いよ」

俺は完全にKに吞まれていた。まるで死ぬ前の最後の輝きと言わんばかりに、俺の記憶に刻みつけようとするかのように強い光を放つKの目に、ただ圧倒されていた。

「……しばらく、音楽から離れてみるよ」

俺はやっこの思いでそう言った。

「何年か活動休止すればいいだろ。俺はそれでも構わない」

Kは笑った。空虚な笑いだった。

「昔は、ギターに触れないなんて言われたら、我慢できなかっただろうな。今は平気だ。何年でも、何十年でも——じゃあ、俺は何のために生きてる。何のために生きればいい。他には何も、できないのに」

帰国までの間、Kは大人しかった。

病院じゃ何もできなかったってのもあるし、俺とCが共同戦線を張って交代で見張っていたせいでもある。

アメリカに帰国後、Kは薬物治療のリハビリセンターに入院した。やけに素直に言うことを聞いたので不審に思ったが、クリーンになれば気持ちも上向きになるだろうと期待を持ったのも確かだ。何より病院なら、Kを見張る目がいくつもある筈だった。

その目論見は入院後、一週間で早くも崩れ去った。

煙草を吸うと言って外に出たKは、そのまま戻ってこなかった。すぐに考えつく限りの友人知人に連絡して、Kを見かけたら知らせてくれと頼んだが、一向に所在は掴めなかった。

三日後、半狂乱になったCから連絡がきた。

Kが銃で頭を撃ち抜いて死んでいるのが、発見されたのだ。

それからのことは、正直あまり覚えていない。

新聞もテレビもどこを見てもKの顔ばかりだったし、俺のところにも数限りなくマスコミが押し寄せてきたが、その全てが別世界の出来事のようなだった。Kはなぜ死んだのか、自殺か他殺か、関係のない人間ほど、そういうことを知りたがるものだ。捨てられるのを恐れたCが殺したのだ、と言い出す人間まで居て、俺は腸が煮えくりかえるような怒りを感じた。

Kが死んだ。

この事実の他に、重要なことなんて何もないのではないか。仮にCが殺したのだとして、それで何が変わるというのか。

あの輝くばかりの才能は、もう永遠に失われてしまったのだ。その喪失の意味を、本当にわかってしている人間は何人いたのだろうか。

Kの葬儀が終わって暫くしてから、俺はCと二人で話す機会があった。たまたまKの墓の前で、行き会ったのだ。

「あんななの」

Cは俺を見て、挑発するように眉を動かした。

「先に言っておくけど、彼の遺言に私は関知してないから」

Kの遺言では、何曲かの印税がCに入るように定められていた。流石にそれに文句を言う気はなかったが、それをCがどう思っているのかは気になった。Kが死んだ直後こそ取り乱していたものの、それ以降メディアの前でも平然としていたこの女は、やはり売名目的だったのだろうか。

Kの死から一ヶ月後、Cは新たなアルバムを発表していた。いい作品だ。と同時に、Kの死に便乗してセールスを伸ばそうとしているのではないか、という疑念が浮かんたのも事実だ。

Kが自殺する前、最後に電話したのはCのところだった。

何を言ったのかと聞くと、「あの人らしいことよ」とCは苦笑し

た。

「こっちは色々言ってるのに、聞きもしないの。ただ『何があったもお前は良いレコードを作ったってことだけ覚えておけ』って」

そこでCは顔を歪めた。今にも泣き出しそうな、無防備な子供の
ような顔だった。

だが俺が何かを言う前に、いつもの強気な表情に戻り「平気よ」と呟く。

「私は強いもの。何があっても大丈夫——彼だって、そこに惚れたって言っていたもの」

Kは二十七歳でこの世を去った。

残された者達はその存在を惜しみながらも、やがては忘れ、時々過去の存在として思い出すだけになるだろう。

だがKの音楽だけはこの世に残り続ける。

お前がかつて愛し、愛せなくなった音楽を、この世の誰かが代わりに愛し続ける。

だからお前が生きたことも、お前の作品も、無意味なんかじゃなかった。

そう俺は思っている。

(1) I hate everything about you

最初にギターに触れた時のことは、今でもはっきり覚えてる。

十四の誕生日だった。

その頃、俺を養っていた伯父が、何の気まぐれか買い与えてくれたのだ。アル中で、一年中大した理由もなく殴りかかってくるような男だったが、ごくたまに寛大になることがあって、その時がそうだったのだろう。

「たまにはお前にもいいことないとな」

と、にやけ面で渡されたそれに、俺は一目で夢中になった。

何の変哲もないエレキギターだ。ギターなんて、突きつめて考えればただの死んだ木でしかないが、それを手にした時、俺は不思議な安心感を覚えた。まるでずっと探していた半身に出会ったような――俺が求めてやまないものを見つけたような気がしたのだ。

電気が走ったような衝撃と、深海の底に沈められた隔絶感を同時に感じることでできたとしたら、

こんな感覚だったろう。

ほとんど呆然と宝を抱き抱えていた俺は、酒瓶のぶつかる音で我に返った。まずい。あの男が酔っ払ったら、自分で買ってきたことも忘れてギターを酒代に換えに行くことは間違いない。

素早く自室に避難した俺は、改めて手に入れたそれをしっかりと抱え込んだ。

硬い弦を軽く弾いて響いた音は、魂の奥底で俺を苛んでいた音だった。

俺にしか聴こえなかった音が、実体を持ったのだ。

それは、言葉に言い表せないような感動だった。

ただ溜めこんで発散させる術のなかった負のエネルギーを、解放する道が目の前に開けたのだ。

嬉しいなんて陳腐な表現じゃ、全然足りない。もっと純粹で、もっと凶暴な感情だった。

俺は、どうしてそうするのかわからないまま、声もなく泣いた。

人間の性格は生まれながらに決まっているものなんだろうか。それとも、生まれた時は誰でも白紙状態で、経験や環境によって後天的に作られるものなのか。

後者ならば、俺という人格が決定づけられたのは、間違いなく八歳の時だろう。

あの日、親父は一言も別れを告げずに出て行って、二度と戻らなかった。

間抜けな餓鬼だ。目の前からいなくなるまで、自分が捨てられるかもしれないなんて考えもしなかったんだから。でもそれも無理はないだろ？俺は親父を愛していた。ボクシングが好きで、陽気で、片づけが下手な親父のことを。親父も俺を愛していると言った。

人間は、愛している人間をそんなに簡単に捨てられるものなのか？——わからない。今でもわからない。俺の何が悪かったのか。どうすれば親父を引き止めることができたのか。

わかっていたのは、わからせられたのは、泣いても叫んでも親父が戻ってこないってことと、人間の「愛」なんて信用ならないものだってことだけだ。

それからの数日間、自分の何かが死んでいくのを俺はじっと観察していた。おかしい気分だった。死んでいくのも、それを眺めているのもどちらも俺自身で、苦痛に打ちのめされながら同時にそれを他人事みたいに冷ややかに観察する意識もあった。まるで科学者みたいに。

目に見えないものこそ、失ったら二度と戻らない。
完全にそれがくたばってから、ようやく俺は「ダディ」に捨てら

れたんだってことを理解して、自分なりに事実を受け入れた。いじらしいだろ？

そんないたいけな子供に止めを刺したのは、誰であろうお袋だった。お袋には、男がいた。ま、よくある話だ。そいつと暮らすには俺が邪魔だった。だから、「俺のために」俺を親戚に預けることにしたそうだ。

……俺のため、ね。

便利な言葉だ。あんたは、そうやって俺の苦痛の矛先を自分に向けさせないようにしたんだろ。俺の感情なんていうくだらないものに、自分の新しい生活を邪魔されなくなかったんだろ。わかってたよ。あんたの望みくらい。だって俺はあんたを愛してたから——たとえあんたが、俺をお荷物としか思ってたんだとしても。

泣いて縋ることに意味がないこともわかってた。

俺の言葉も俺の感情も、お袋を動かすことなんて出来はしない。俺は無力だ。無力でちっぽけで、誰からも必要とされないゴミみたいな存在。

そんなことに気づきなくなかった。でも、それからずっと、どこで何をしていても、その意識が頭から離れることはなかった。

俺をこの世に生みだした両親ですら、こんなに簡単に俺を捨てることができる。だったら、何を抛り所にして生きればいい？ 赤の他人に、何が期待できる？ 何も期待できやしない。

多分その時に感じていたものが、いわゆる無力感ってやつだったんじゃないだろうか。

以来、俺は可愛げのない餓鬼に変貌した。

周りにいる人間はいつもこいつも嘘つきに見えた。実際、人間は嘘つきだ。それは悪いことじゃない。だけど俺にとっては、その嘘に騙されることは凄まじい恐怖だった。もし騙されて、好意を持った相手に裏切られたらどんな思いをするのか、もう知っているんだから。

それに俺を引き取った親戚どもは、断じてお袋が言ってたように

「俺のため」になるような連中じゃなかった。

両親含めて、血縁のある奴らは揃いも揃って金もコネも実力もない碌でなしだ。だからアバディーンなんてど田舎で、一族全員が顔突き合わせて暮らしてる。伯父二人は自殺した。余りにも貧しくてあいつらが死んだところで、社会的にも個人的にも、何の損失でもないけどな。

俺も死にたかった。

誰からも厄介者扱いされて、どこにも居場所がないのが惨めだった。親戚共にしてみれば当たり前だ。他人の子供に使う金なんてないだろう。あからさまに言われることも、遠まわしに態度で示されることもあった。俺ができたことは、主張しない。期待しない。要求しない。これだけだった。そして、俺にこんな思いをさせて会いにもこない両親が憎かった。でも自分から会いに行くことはできない。そうしたらきつと二人とも困るだろう。

段々と存在を消すことと人の顔色を窺うことだけ上手くなって、将来はきつと俺も親戚共の仲間入りだろうなと、そう気づいた時には言いようのない絶望を感じた。何の取り柄もなくて、はした金のためにあくせく働いて、それでも貧乏で、気がつけば何も得ないまま中年になって、自分の駄目さ加減に一生失望し続ける人生。そんなものを送るくらいなら、ここで存在自体をなかったことにしたいと思ってた。

学校も嫌いだった。

したり顔で偉ぶる教師にも、無邪気で残酷なクラスメートにも苛々した。子供が天使か何かだと勘違いしている奴がよくいるが、お目出度いにも程があるね。子供だろうと何だろうと、人間には違いない。理由にもならない理由で、自分と同じ種族を傷つけても平気な生き物だ。

どういうわけか、周りの人間のことは一人も好きになれなかった。十歳頃から、自分と他人は何かが根本的に違うんだって感覚があって、どうしてもそれに上手く目を瞑れなかった。

俺が、体育会系の活動に全く興味を持てなかったってことも一因だろう。学校で幅をきかせるのはああいふ連中なのに、俺ときたら奴らと共通点が何もなかった。

ただ、最大の原因は俺のある種の過敏さにあった。

本当は凄いやと思っていなくて、感心して見せる。本当は妬んでいるくせに、褒めたたえる。本当は見下しているくせに、同情する。

逆もまた然りだが、そういうことをごく自然にやっている普通の人間が、気持ち悪くて仕方なかった。平気なのか？嘘についても、欺いても平気なのか。本心じゃない、表面だけの社交辞令でも満足なのか。それとも本気でそれが嘘だと気づいてないのか。

どっちにしても、その鈍さが神経に障って我慢できなかった。

騙すなら完璧にやってくれ、と何度言いそうになったことか。

周りにとっても、俺は扱いづらい餓鬼だったと思う。神経質で、他人のちょっとした表情、言動から勝手に裏を読み取って、勝手に傷つく。自分に対してだけじゃなく、他人に対する悪意にも耐えられなかった。正義感が強かったからじゃない。ただ、誰かが誰かを馬鹿にしたり貶めるたびに、自分が人間に失望することに耐えられなかった。俺を捨てたあいつらも、遊びの延長で他人の心に傷を負わせる連中も、特別な人間じゃなくどこにでもいるありふれた人間で、こんなことでいちいち動揺する方がおかしいんだってことを思い知るのが、嫌で嫌でたまらなかった。

毎日、夜になってベッドに潜り込むと、頭の中からノイズが聞こえる。目を閉じて耳を塞いでもそれは鳴りやんではくれなくて、気が狂いそうだった。妄想？そうかもしれない。いつだって俺を一番苦しめるのは俺自身だ。

音楽を聴き始めたのは、ノイズを別の音で塗り替えたかったからだ。

音の種類は何でも良かった。けど、お上品なクラシックよりは騒がしいロックの方が好ましい。嫌でも耳に飛び込んでくる轟音に集

中して、自分の中の病んだ音は聞こえないふりをする。伯父にギターを与えられる十四の年まで、そうやって他人の音にしがみついてやってきた。

ギターを手に入れて以来、俺は昼も夜も相棒を離さなかった。

まるで何かにとりつかれたみたいだ。ほとんど学校も行かないで、一日中部屋にこもってひたすら練習している時もあれば、ただ弦をかき鳴らしているだけの時もあったし、何もしないでぼんやりしている時もあった。

普通、ギターをやり始めたばかりの餓鬼は他人の曲を練習して上手くなるもんだけど、俺は違った。他人の曲じゃ駄目だ。自分の曲をやらなきゃ意味がないってわかってた。理屈じゃない。本能だ。俺にとっての作曲や演奏っていうのは、ただの音とリズムの組み合わせや指の反復運動じゃなく、何て言うか一種のセラピーみたいなもので、自分の感情を吐き出すはけ口でもあった。

なぜ人は音楽を演奏し、絵を描き、架空の人間を演じるのか。その行為に救われるものがあるからだ。

他人の賞賛や批判は、おまけに過ぎない。勿論、褒められた方が気分はいいが、だけど他人の言葉では俺は救われない。どう説明すればいいのか……自分の苦痛を音という媒体に乗せて、一つの曲として完成させた時、その曲は俺の一部ではあるが俺そのものではない。俺そのものではないが、俺の一部は込められている。

俺は、俺自身が嫌いだ。親父にすら捨てられた、何の魅力もない人間。誰にも生を望まれない、生まれながらの負け犬。そんな自分をどうして好きになれる？

おかしいことに、「自分」は好きになれないのに、「自分の音楽」は結構気に入っていた。なぜだろう。「作品」を通してだけ、俺は自分を肯定できた。俺はどうしようもなく女々しくて弱くて何の取

り柄もない屑だけど、俺の音は俺っていう人間ほど酷くはないんじゃないか、だったらそのために生きていてもいいんじゃないかと思えた。

だからギターと音楽は、俺の救いだった。

もしそれが周りにとって世界一耳障りな音だったとしても、きつとやめられなかっただろう。むしろ、相手に聴く耳がないんだと嘲笑ったかもしれない。素人の分際で、傲慢な考えだ。だけど自己満足でもよかった。ちっぽけなプライドだったとしても、それが心の拠り所になってくれるなら。今まではそれすらもなかったんだから。

ハイスクールに入学した頃、俺はまたお袋と暮らすことになった。あいつが息子の存在を思い出して母性に目覚めたから、とかじゃない。例の酔っ払いの伯父が、酔った勢いで人を殴って逮捕されたのだ。お互いにとって運の悪いことに、殴られた相手は重傷だった。そういうわけで俺は本来の保護者のもとに戻されることになったわけだが、離れてた月日関係なく母子仲良く、なんてことにはならなかった。

なぜ？

単純な話だ。

お袋には新しい家族がいた。親父と離婚した時とは別の男だ。そんなことじゃないかと思ってたから、俺は行きたくなかったのに、法律はそれを許さなかった。糞が。

マッシュは、ああマッシュってのは継父の姓だが、伯父と同じく典型的な労働者階級の男だった。大柄で、粗野で、テレビでスポーツ中継を見るぐらいしか趣味のない男。俺の嫌いな体育会系の同級生共が成長したらこうなるんだろうと簡単に想像できた。こいつに養われなきゃならないのかと思うとぞっとしたが、向うも俺のことを嫌ってた。配偶者の連れ子なんて、下手すれば他人より厄介

だ。餓鬼の頃ならともかく、こんなにでかくなってちゃん。加えて俺はちびで痩せてて、マッシュズが崇拝するアメフトもやってないし、目つきが悪くて可愛げもない。

多分、殴られることになるだろうな、と初対面で早くも思った。自分がこういう人間の嗜虐心を煽るタイプだってことは薄々悟っていた。諦めが肝心だ。

まあいいさ。殴られるのも無視されるのも慣れてる。好きなようにすればいい。だけど俺はお前の望むようにはなれない。ならないんじゃない。嫌がらせとか反抗心からの気持ちじゃない。これは厳然たる事実だ。自分を変えるってことは、物凄く難しい。それがこだわるに値しないところであっても、本人でさえ捨てたいと思っているようなところであっても。

マッシュズが俺の考えを察していたかどうかは知らないが、現実にはそれほど酷いことにはならなかった。

というのも、あいつには既に獲物がいたからだ。つまり、お袋があてがわれた二階の部屋でギターを弾いてると、酔ったマッシュズがお袋を罵るしゃがれた声と、鈍い物音が聞こえたもんだ。

俺は聞こえないふりをした。殴られる痛みも、次にいつ殴られるかわからない恐怖も、知っていたからこそ聞こえないふりをした。自業自得だ。

自分で産んだ子供も捨てるような無責任な人間だから、そんな目に遭うんだ。手に入れたかったのがそんなものだったって言うんなら、せいぜい享受すればいい。

本心のはずだった。

だけどある朝、顔を腫らしたお袋を見た時は腹が立った。無性に腹が立った。マッシュズがいたら撃ち殺してやるところだ。銃がしまっている場所は知ってる。

「別れるよ、あんな男」

言うつもりもなかった言葉が飛び出した。お袋は俺を責めるような目で見て、疎ましげに口を開いた。

「そんなことできるわけないでしょう」

「何でだよ。男なら他にいくらでもいる。寄生するならもっとマシな相手にしろ」

「子供がなんて口利くの。あんたもあたしも、あの人に養われなきゃ生きていけないのよ」

「そうだな。確かに、俺は誰かに仕方なく生かされてきた人間だよ。でも殴られて喜ぶ変態じゃない。やらせるだけじゃなくてそういう趣味にも付き合ってやるなんて、サービスのいい淫売だな」

お袋は傷ついたようだった。涙ぐんで、恨んでるのね、と哀れっぽく訴えた。でも仕方なかったのよ、わかってちょうだい。

俺はただ立ち尽くしていた。怒りのあまり？それもある。「仕方なかった」の一言で俺の今までを片づけられるのは我慢できなかった。やめろと叫んで揺さぶってやりたかった。だけどそれ以上に、お袋が傷ついているのを見て俺も傷ついていた。傷つけてやりたかった筈なのに、実際にそうしてみたら溜飲が下がるどころか、ひれ伏して許しを請いたい衝動と必死に戦わなきゃならなくて、そんな自分に愕然とした。

何てぞまだ。

まさか俺は、まだこの女に愛されたがってるっていうのか？

冗談じゃない。そこまで惨めな存在になり下がる気はなかった。もう餓鬼じゃないんだ。今までだって一人でやってきた。この女の愛情も関心も必要ないし、欲しくない。そうだろう？

——いや、必要とされていないのは、俺の方だ。

考えないようにしてきた疑問。本当は生まれることすら望まれてなかったんじゃないか。貧乏人が避妊に失敗してできた欠陥品がこの俺というわけだ。過ちの象徴。疫病神。お袋が俺に抱いているのは罪悪感だけ。俺はお袋を苦しませることしかできない。でも俺が生まれた事実は変えられない。それが辛い。いつだって俺は人の望み通りにできない。

急に黙り込んだ俺に、お袋は怯えたような表情になった。こっち

の機嫌を窺うように、どうしたの、と弱々しく訊いてくる。

俺は目を逸らす。

何なんだよ、あんたは。愛してくれないくせに。義務感しかないくせに。

言えよ。

俺が邪魔だって。産んだのを後悔してるって。消えて欲しいって。言われなくたって、目を見ればわかる。わかっていても、それでも俺はどこかで期待している。愛してる。ほとんど自分の意志と関係ないところで。愛したくなんかないのに。俺を愛していないあんたのことなんて、ただ軽蔑して馬鹿な女だってせせら笑ってやりたいのに、それさえ叶わなくて愛されないことに対する劣等感から逃れられない。

頼むから、心から頼むから、俺にあんたを憎ませてくれ。

お願いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7687n/>

it's better to burn out than to fade away

2011年4月7日19時55分発行